法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<随想>ジェノバだより

佐川, 誠義 / SAGAWA, Masayoshi

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
30
(開始ページ / Start Page)
81
(終了ページ / End Page)
82
(発行年 / Year)
1984-08-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019400

ジェノバだより

佐川誠義

イタリアに来てもうじき三ヶ月が経とうとしています。従って、いったん国外に出なくてはなりません。でも、離れたくない気持でいっぱいです。イタリアの文化を支えているこれら愛すべき人々。フランスとはあんなに近いのに何というちがいでしょう。イタリア人達のやさしさにとり囲まれて、私の生活は極めて快適なものになりました。トランキライザーを全くのまなくても平気な日が二ヶ月以上もつづいています。このままの状態がつづけば、日本でもよその土地で眠れるようになるでしょう。

この三ヶ月でイタリアについて気付いたことを並べましょう。

ことばについて。これは絶対にイタリア語でないとダメ。彼らの英語はひどいものです。ただし、駅のインフォメーションなどは、たまに英語を使いたがる人がいるので、英語を意識的に使います。また、ハンバーガーショップなどは、わざとアメリカン・イングリッシュを使うと大変よろこばれます。

音楽。オペラは衰えていきつつあるのでしょうか。最も幻滅を感じたことのひとつ。ローマでは「マノン」(マスネー)、「パルジファル」、「Civil war」というフランス、ドイツ、アメリカのオペラをみました。どれもこれもうんざり。どうしてイタリアで外国のオペラばかり目にしなければならないのでしょう。毎日オペラをみるなんて、とんでもない話で週一回もむずかしい。三ヶ月に七回もイタリアを転々としたのはオペラを求めてと言えます。ヴェネツィアで「夢遊病の女」(イタリアできいた最も質の高いオペラ。ジュン・アンダーソンというスーパーソプラノの出現)、ミラノで「ロンバルディア人」(カレラスが熱演したけれどほんのちょい役。ディミトローバの品の悪い歌)、ナポリで「蝶々夫人」(松本みわ子はよいソプラノだと思うけど、いかんせん日本人で声が小さくて聞えない)、そしてジェノヴァでヴェルディの「レクイエム」(歌手の音程の悪いのはちょっと信じられないほどで、イタリア最低の上演)。ところで、街にはロックが溢れ、今この手紙を書いているのはディスコ・ミュージックがぎんぎん鳴りひびいているハンバーガー・ショップ。ラジオもディスコの音楽ばかりです。

オーディオ。今、コンパクトディスクのことでもちきりです。レコード屋のショーウィンドウは中心にCDがおいてあるのが普通です。オーディオ誌は五冊もあり、どれもこれもCDの話題ばかり。

CDプレイヤーを持っていない私は肩身が狭い思いをしています。そして、並んでいるプレイヤーはフィリップスとマランツのものを除いてどれも日本製のものばかり、精密機械における日本のプレスティージは極めて高いものがあります。日本で造って向うのマークがついているものには、わざわざ「実は GIAPPONE で造られている」という説明があるほどです。日本は何といっても、ソニー、カシオの国、ニュー・テクノロジーということばをいやという程きかされました。

人々、男性と女性について。女性が絶対に優位の国、男は尻にしかれています。ぼくの眼にも、男は女よりはるかに子供っぽい。レストランでデザートに、禿ちゃびんのひげのおっさんがどんぶり一杯のクリームを食べるとき、アイスクリームを頬ばるとき、その眼はまさにいたずら小僧のそれです。

料理。これは予想どおりの素晴しさ。ここでのコースは大きく分けて、三つの部分から成ります。スープ類が第一部。これは間違っても日本のポタージュやコンソメと混同してはいけません。次の第二部のメイン・ディッシュとともにイタリア料理の最も大切な部分です。スープ類といいながら、山盛のスパゲッティやマカロニが主なものです。日本では野菜スープの意味で使われるミネステローネはお米が沢山入った雑炊のこと。そして、メインの方はスープ類の華々しさにくらべるともう一つさえません。ひょっとすると、メインよりスープ類の方が重要なものかもしれません。第三部はデザート。山盛りのクリームや大きなショートケーキが主なもの。スパゲッティやケーキを食べず、あまりおいしくないメインディッシュだけをとるのはアメリカ人と日本人だけではないでしょうか。私はかならず全部平らげます。日本の三倍以上の量です。レストランでは「日本の貧しい学生」に沢山食べさせるべく、山盛りのパスタ、山盛りの肉（ないしは魚）、山盛りの野菜をふんぱつしてくれます。毎食というわけです。

以上はぼくの眼にうつったイタリア。反対に、イタリア人にうつったぼくの姿は？　よくいわれることですが、日本人は西欧人の眼には子供っぽくうつります。しかし、ぼくの場合はそれが極端で、実際の年齢の半分以下の子供にしか見えないらしい。最初はよろこんでいたのですが、今はうんざりです。十八歳未満お断わりのところで年齢をきかれ、四〇歳と答えると、大げさに手をひろげられました。街で「へい、小僧（ragazzo）」と呼びかけられることしばしばです。第一自分の仲間として近づいて来るのが、乳ばなれをまだしていないようなハイティーンたち。従ってぼくの職業を人にきいてみて最も多かったのは、ファッション関係、次に画家、詩人というのもありました。絶対に出てこないのが教員です。しかし、この点は日本と変りません。

こういうわけで、イタリアとはものすごくウマが合うみたいで、やはり来てよかったとしみじみ思います。極めて健康的な生活を送っています。

（文学部教授）

☆この手紙は、杉本圭三郎、堀江拓充宛の私信ですが、興味深いにしても個人的にわたる部分を割愛して並べかえたものです。文字づかいや表現等は変更していません。文責は両名にあります。